
陰な僕と武器な彼女

ハル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

陰な僕と武器な彼女

【Nコード】

N0948BA

【作者名】

ハル

【あらすじ】

バイオテロが起こり、世界中の国家が崩壊してから5年。テロリストの壊滅と世界の平和を願って、陽と京を中心に組織を作り上げる。敵地に武器を奪いに行き、そこにいたのは一人の少女。その少女と京には特殊な力があり、その力を使いテロリストを壊滅へと導いていく。ジャンルが分からないので、教えてもらえると嬉しいです。

『沈まぬ太陽』 結成

「父さん、何するの？」
僕は今、ベッドに拘束されている。

「京、怖がることはないんだよ。これはただの栄養剤なんだから嘘だ。そんなことで、拘束なんてするわけがない。そんなことは10歳の頭でも分かる。」

そうしてる間に、父さんは僕の腕に注射を始める。

「うわぁああああ」

あまりの激痛に大声で泣き叫んでしまう。

「ちつ、偶然できたもので、調べても全く成分が分からなかったが、やっぱり毒の類だったのか」

どうやら、今注射されたのは毒だったらしい。
酷いよ父さん。僕は父さんの子供だったのに。

「まあ、いい。もともと利用価値なんて期待してなかったからな
それって、さっきの薬のこと？それとも僕のこと？
でも、もう声も出せないくらい苦しい。」

「明日は祭だからな、実験に協力してくれたお礼に、ワクチンも打

つといてやる。さっきの薬で死ななかつたらラッキーだと思いな
父さんがまた注射をしてくる。
全身が痛くて、もう痛みなんて感じない。

「じゃあな京、また会えたらいいな。生きてたらだけだな」

父さんは笑いながら、部屋を出て行く。

ワクチンを注射され、心臓が一度大きく鼓動し、更なる激痛に意識
が遠くなる。

「んん、嫌な夢を見たな」

僕はもうあれから5年が経って15歳になっている。

「どうした京？またあの夢を見たのか？」

「あっ、うん」

話しかけてきたのは、親友の陽。5年前からずっと一緒だ。
あの日は、父さんに人体実験された日。

「でも、どうせ京の親父もあのテロで死んでる。気にするな」

「……そうだね」

違うよ陽。僕にワクチンを打ったのは父さんだ。その父さんが死んでるわけがない。

そして、あのテロと言うのは、世界規模でのバイオテロのことだ。

僕に人体実験した10日後に世界中でバイオテロが行われた。

新種のウイルスで、感染力と致死性が強く、世界の人口の一人に一人しか生き残れなかった。

そんな悪夢のせいで、各国の国家や企業は崩壊していった。

生き残った人達も、家族は自分だけの者が多く、無気力に生きる者がほとんど。

生き残った人達で働いているのは、食料生産をする人達か、テロリスト達が自分達のために立ち上げた軍事関係の企業に就職するかで、他の者はその日暮らしがやっとだ。

「京、来週だが俺らの初仕事をやろうと思ってる」「陽がしだしたのは、ずいぶん急な話だ。」

まあ、僕も一応はNo.2なのだから、リーダーの陽からのこのような提案も、当然と言えば当然なのだが。

「前から考えてたにしても、ずいぶんと急だね」

「まあな。それに、近々、この近くにあるテロリストの支部に武器の搬入があると聞いた。そこで、武器の増強を行う」

人々はテロ以降、被害のない国を求め、5年のうちに日本に落ち着いた。
よって、世界の生き残りのほとんどは日本にいる。
もちろんテロリスト達も。

「で、作戦は？」

陽はニヤリと笑いながら続ける。

「もちろん考えてるぞ」

僕も悪役になった気分でニヤリと笑う。

「聞かせてもらおうか」

「俺と京、後はフィオとカインで潜入する。その間に大悟を中心に戦車とかを使って陽動。でどうだ？」

陽は誉められるのを期待したような表情になる。

「まあ、いいんじゃない。妥当な作戦だと思うよ」

陽は嬉しそうな顔をした後に、考え込む仕草をする。

「陽、どうしたの？」

「ん？いやな、大事な事を考えてねえなあって思ってたさあ」

陽が考える大事な事って、何なのだろう。

凄く気になる。

「大事なことって？」

「俺達の組織ってさあ、名前ねえよなって思ったんだ」

確かに、今まではそれほど重要性を感じなかったもので、全く気にしてなかったが、名前があった方が組織っぽい。

「来週までに考えればいいんじゃない？」

「京も考えとけよ！」

「分かってるって」

それから、2人で組織の中枢に当たる広い場所に移動する。

組織は偶然発見した、日本軍が秘密裏に、造っていた地下基地を使っている。

その軍隊もないから、誰にも迷惑はかかっていない。

そして、そこには非常時に備えて蓄えられてはいた武器があり、発電施設までついているので、基地にするには最適な場所だったのだ。

司令室兼溜まり場に向かうと、陽が言っていた潜入メンバーと、大悟とリリーがいる。

そして、陽が武器奪取の作戦を言い、全員の了解を得る。

リリーは司令室から、全員に戦況などを伝える役目。

最後に組織名を募集して作戦の報告は終了。

「そついえばさあ、陽、武器が搬入されるんなら、その搬入してくるトラックを襲えばいいんじゃない？」

「いや、搬入はトラックじゃなくて、基地に直接空路で搬入されるらしい。だから、搬入された武器を武器庫に運ばれてから、トラックと武器を奪って逃げる」

陽は馬鹿っぽいのに、意外といろいろ考えているらしい。

「じゃあ、僕の命も全てを陽に預けるよ」

「任せとけ！って言いたいが、危ない時は自分の命を優先させるよ」

「仲間の命が危ない時は別だよ？」

言うと、陽は笑いながら述べる。

「俺もその場面なら、仲間の命を優先させるだろうから、反論できねえ。まあ、出来る限りで自分を大事にな」

「分かってるよ」

そして、一週間が経ち、潜入作戦の日になる。

「今日言おうと思って、黙っていたが、組織名が決定した。組織名

は『沈まぬ太陽』」

陽にしては、頑張ったんじゃないかなって思う。
なかなかいい。

陽のことだから、名前の意味は、無気力に生きてる人達の道標。消えることのない、太陽のように大きな道標とかそんな感じだろう。

「じゃあ、『沈まぬ太陽』の初陣だ」

リリーと司令室のメンバー以外が基地を後にする。

『沈まぬ太陽』 結成（後書き）

新作です。

近未来系は始めてなので、アドバイスとか欲しいです。

誤字・脱字・質問があれば感想欄までお願いします。
評価、感想、お気に入り登録よろしくお願いします。

武器の少女(前書き)

評価とか感想とかお願いします。

武器の少女

作戦が開始され、目的地のテロリストの支部へと向かう。

テロリストの支部はかなり分かりやすく、見た感じに「怪しそうだ
な」って空気が伝わってくる大きな基地になっている。

まあ、今の世界にある基地っぽい建物は全部テロリストのものだからと言っ理由もあるのだが。

「京、陽動が一発デカいのかますから、それで陽動が引きつけてる
うちに、攻め込むぞ」

「無論、分かってるつもりだよ」

それから10分ほど、敵基地近くで待機していると、リリーからの
通信が入る。

『音声聞こえてますか?』

「リリー、大丈夫だよ」

僕が言うと、通信越しにリリーがホッと胸をなで下ろすのが聞こえ
る。

『沈まぬ太陽』のメンバーは全員が、左耳と左目に通信機が着いて
いる。

左耳はイヤホン型で、音声の受信と送信を行っている。

左目はコンタクト型で、着用者には、地図が立体的に映し出され、

味方と敵の大隊も映し出されるリリー特性の特別装備だ。
さらに、銃を構えると、照準補助機能まで付いているのだ。

『地図送りましたが、インストールできましたか？』

「ああ」

『じゃあ、カウントしますので、終了したら作戦開始です』

『3』

『2』

『1』

陽、フィオ、カインの息を飲む音が聞こえる。

『0』

ドゴーン

一拍置いて、爆発音が聞こえる。

見てみると、大悟達の陽動で敵基地に一発ミサイルをぶち込んだら
しい。

敵基地からサイレンが鳴り、慌ただしくなっているのが分かる。

「大悟達も派手にやったなあ」

「やりすぎよ」

「でも、大悟さんなら連射しなかっただけでも誉めるべきです」

陽、フィオ、カインの順にそれぞれ大悟について述べる。

フィオは金髪碧眼の美少女で、拳銃やナイフを使つての近接格闘がかなり強い。

そして、陽に恋する女の子だ。

カインは栗色の癖のある髪をしていて、他のメンバーが15歳なのに対し、12歳で皆の弟的存在だ。

ハッキングや鍵開けが得意で、潜入には居なくてはならない存在なのだ。

最後に陽、陽は持ち前の明るさで皆を引っ張っていき、抜けてるところもあるが、人を引きつけるカリスマ性がある。

僕は陽のお守り役みたいなもので、初期メンバーだからNo.2になつてただけだ。

少し経つと中が静かになり、外にテロリストの兵が出てくるのが分かる。

「行くぞ」

陽に続き、通気孔の中に入り、進んで行く。

「僕とカインで武器庫周辺は制圧しとくから、陽とフィオはトラックを奪って、中まで突っ込んできて」

「分かった」

僕もさすがに無理な頼みかなくて思ったが、陽は了承してくれた。

陽は自分でやると言えば、必ずやり遂げるので問題ないだろう。

「じゃあ、僕達はここで別れるよ」

降りようとした時に、言い忘れていたことを思い出す。

「あつ、陽。君は僕の太陽だ。陰の僕には、君の明かり無しじゃ生きていけない。だから、死ぬなよ」

陽はニヤリと笑みを浮かべる。

「当たり前だ。京こそ、俺を置いて死ぬんじゃないぞ」

「分かってるって」

僕とカインは、下の様子を確認してから降り立つ。

陽とフィオは引き続き通気孔を進んで行く。

「この先を進んで右つきあたりの部屋か。カイン行こう」

「はい、京さん」

僕とカインは拳銃を抜き、慎重に進む。

リリーのコンタクトで分かるのは、敵の大きな部隊のだいたいの位置だけで、数人しかいないと分からないのだ。

通路の左右を確認すると、武器庫の前に5人いる。
想定範囲内だ。

僕はカインに向けて、笑みを向ける。

「カイン、僕の後に続いてね」

「はい」

見つからないようにカインは小声で喋っている。

「行くよ」

そう言うと、僕はいきなり飛び出し、慌てて迎撃体勢に入る兵士達にリリー特性の発煙筒を投げ、一気に煙に包まれる。

すぐさま、僕とカインは体温感知のゴーグルを着け、敵のいる方へ一気に駆ける。

ある程度近付いたところで、サイレンサーを付けた銃を向け、コンタクトで照準補助をし、続けざまに兵士を撃っていく。
隣を見るとカインも同じように、敵を撃っていき、やがて立っている敵はいなくなり、煙が晴れていく。

「はあ、人を射殺する感覚って初めてだけど、できれば避けたいな」

「そうですね」

悲しみを浮かべながら言う僕に、同じような表情のカインが答える。

「じゃあ、カインよろしく」

「はい」

カインは小型のコンピューターのようなものを取り出し、鍵を開けようとしている。

僕はこの間はもちろん見張り。

「開きました」

「早いな」

時間的には3分も経っていない。

「開けますね」

カインが扉を開けると、収納された武器が大量に出てくる。

ザッと見て回ると、棺桶のような箱が目に入る。

「これ、何だろう」

ガコッ

「えっ」

棺桶を開けると、中には同じ年ぐらいの女の子がいた。

女の子は、長い銀髪ストレートに整った顔立ちから、人形にも見えなくもない。

あまりの美しさに思わず見惚れてしまう。

それより、さつきから胸が熱い。

パチッ

しばらく見ていると、女の子が目を開け、目が合ってしまう。

「あっ、えーっと、おはよう」

「……おはよう」

どうやら、言葉での会話はできるらしい。

ドキドキしてしまって、まともな会話が出来るか心配だ。

「君ってテロリストの仲間？」

いきなり直球すぎたかな。

「……テロリスト？」

分からないような表情をしているので、たぶん違うのだろう。
無理矢理連れて来られたのかもしれない。

「行くところないなら、僕達と来ない？」

「いいの？」

捨てられたら猫のような目をしているから、放っとけるわけがない。

「もちろんいいよ。皆が歓迎するよ」

特に僕が。

「じゃあ、行く」

上半身だけ起きていた彼女が、立とうとするので、右手を差し伸べる。

「ありがとう」

少女は手を取り、立ち上がる。

「ようこそ『沈まぬ太陽』へ」

少しの間が流れ、カインがこちらに走ってくる。

「京さん、陽さん達がトラックで突っ込んできてます。それより、その人誰ですか？」

「誰？だって」

僕とカインの視線が少女の方に向く。

「ルナ」

「だって」

ルナは僕の方を見て言ったのでカインに振る。

「僕に言われても。それより、ルナさんはどうするんですか？」

「彼女なら僕達に付いて来るってさ」

ルナはコクコクと頷いている。

「そうですか。陽さんなら二つ返事でOKすると思いますしね」

陽は捨てられてる猫を拾ってきたりが、よくあったので、今回も反対するわけではない。

「まあね。じゃあ、武器を運ぼうか。ルナさんも手伝ってもらえる？」

「ルナでいい」

「分かった。僕も京でいいよ」

「京、分かった」

ルナに初めて名前呼ばれたが、何かむずむずするなあ。

ドカーン

扉から物凄い音が聞こえ、見てみるとトラックが突っ込んでいた。

「陽の奴、またやってくれたな」

「ですね」

近くにあった武器を持ってトラックに向かう。

「やあ陽、また派手にやったね」

「言っとくが、ブレーキとアクセルを間違えたりしてねえぞ」

間違えたのか。

「分かったから、武器運ぶよ。カインは見張りお願い。あと、この子はルナ、ここで寝てただけど、仲間になったから、連れて行くけどいいよね？」

「別にいいぞ」

カインはトラックの裏に回り、見張りを始める。

「でも陽、いいの？敵陣の中にいた子とか危なくないの？」

「大丈夫だよフィオ。この子は無理矢理連れてこられたっぽいし、危なそうな感じはないから」

「京がそう言うなら、大丈夫でしょうけど……」

フィオは口ごもる。

理由は分かっている。

陽の周囲に美人な子を近付けたくないんだろう。

「私に行かない方がいい？」

ルナが悲しそうにフィオに尋ねる。

「京が大丈夫って言うてるから、来てもいいわよ」

「ありがとう」

薄ら笑みを浮かべながらルナがお礼を述べる。

「じゃあ、武器乗せるよ。ルナも手伝ってね」

「うん」

それからしばらく経ち、だいたいを乗せ終わる。

「敵の増援来ました」

「こつちもだいたい乗せ終わってる。カインはトラックに乗れ、戻るぞ」

運転席に陽、助手席にフィオ、武器と一緒に僕とカインとルナが乗る。

「じゃあ、行くぞ」

トラックは一回前進し、方向転換して入り口に向けて進む。

敵兵は銃を発砲しているが、このトラックには全く効いていない。

「とほすぜ」

陽は兵の中にトラックで突っ込み、敵兵を撥ねてつき進む。

『大悟さん達は撤退しました。敵主力部隊がそちらに戻ります』

「了解。なるべく出会いたくねえな」

「陽がいるから出会うことになるね」

無線越しに陽と会話する。

しばらくしてからトラックが止まる。

「わるい京、やらかした」

何をかは聞かなくても分かる。

「帰ったらお仕置き」

「潔く受けるぜ」

無線越しに陽とフィオがトラックから降りるのが分かったので、僕達も武器を持って降りる。

「ねえ陽、降りなくても突っ込めば」

そこまで言って理解する。

目の前にいるのは、最新型の兵器である機人だった。

中で人が動かしているのだが、機動力、パワー、防御力がハンパない。

ちなみにリリー特性の機人もいるが、それは大悟達の部隊しか持っていない。

そして、機人は合計で10体、あと、戦車も何台がいるが、機人が一番厄介なので、他はあまり目に入らない。

「今回ばかりは無理かな」

「すまねえ、コンタクトの位置情報でも敵の数的に反応が無かったんだ」

機人は1人が乗る形なので、反応がないのが普通なのだ。

ルナが怯えて、背中に隠れる。

「大丈夫。僕を信じて」

あまり自信はないが、目を見て、出来るかぎり元気付けられるように笑顔で言う。

「うん。京を信じる」

ルナも笑顔で答える。

その瞬間、ルナの体が光り、ルナの体が消え、僕の手の中に剣が現

れる。

「えっ、ルナはどこ？それよりこれ何？」

『京、慌てないで。これは私。京は私を使える特別な力があつただけ』

「何となく分かったけど、ルナを使って戦えばいいんだね」

『そう』

「分かった。皆を守るために力を貸してね」

事情がよく分からないが、分かることもある。

ルナは今、僕の手にある武器だつてこと。

ルナと僕の力があれば、この状況でもどうにかなると言うこと。

「あと、帰ったら説明よろしく」

『分かった』

言い終わる前に駆け出す。

体が軽い。

ある程度近付いたら、一気に詰めようと、足に力を込める。

踏み出した時には、機人の目の前にして、剣を振り抜き機人を右肩から左脇腹にかけて切り裂く。

その隣にいた空中にいる僕に向けて機人がレーザーのようなものを放ってくる。

「おっと」

空中で地面を蹴るようにイメージすると、空気を地面と同じように蹴って、レーザーを避ける。

そのまま、機人に詰め空中から首を横に切り落とす。

それでも動くので、空気を一度蹴って、高跳びの要領で機人の後ろに回り、体勢を立て直しながら、下から上に胴体を真っ二つに切り裂く。

着地した時に、機人が3体同時に肉弾戦で潰しにかかってくる。

機人3体に向かって一気に駆けて、すれ違いざまに胴体を横に斬っていく。

「あと5体」

『柄の部分を掴んで、私を横に向けて』

言われた通りにすると、再び光り、銃のような形態になる。

引き金を引くと、光の光線が放たれて、機人が同時に2体爆発する。再び撃ち、機人をまた2体倒す。

「ラスト」

「京！」

陽の声に振り向けば、機人が陽達の方へ迫っていた。

撃てば陽達を巻き込んでしまう。

「くそっ」

機人の方へ一気に駆け寄る。

機人が腕を振り上げ、その腕は振り下ろされることなく、胴体ごと地面に落ちる。

戦車の部隊はいつの間にかいなくなっていた。

「サンキュー京。増援が来る前に帰ろうぜ」

「そうだね」

剣が再び光り、ルナが隣に現れる。

「ルナお疲れ」

「京もお疲れ」

それから、トラックに乗り込み、逃げるように出て行くが、それから敵に遭遇することはなかった。

武器の少女（後書き）

長くなってしまいました。

誤字・脱字・質問があれば感想欄までお願いします。
評価、感想、お気に入り登録よろしくお願いします。

京のこと

武器を積んだトラックを無事に基地まで運び入れ、司令室兼溜まり場を集まる。

「じゃあルナ、説明よろしく」

「分かってる」

一呼吸置いて、ルナが話し始める。

「まず私は生まれながらの武器。でも、使い方が分からなかったみたいで、武器庫に放置されてた」

納得はできたけど、なぜ僕はルナを使ったのだろう。

「京は私と適合したから、私を使った」

「それは何故か分かる？」

「分からない」

ルナでも分からないらしい。
いろいろ疑問が残るなあ。

「ええい、そんなことはどうでもいい。ルナは京の武器としてだけでなく、俺達の仲間になるんだろ？」

「迷惑でなければ」

「じゃあ決まりだ。ルナが武器だっても、何だっても仲間なのには変わらねえ」

陽が久しぶりに無駄にカツコイい。

つつこんでやるうかと思ったが、空気にやめとこつ。

「あ、ありがとう」

「別にいいって」

涙目でお礼を述べるルナに、またしても無駄にイケメンな陽。

「それで陽、これからどうするの?」

「どうするって何がだ?」

アホだ、陽は絶対アホだ。

こんなことまで説明しないとイケない飛ばす……。

「陽、僕達は今回、初めてテロリスト達の基地に潜入して戦ったよね」

「?確かにそうだな」

「今の世界のトップに喧嘩売ったのに、何も無いわけないよね?」

陽は納得したような表情になる。

フィオ達も呆れ顔で陽を見る。

やっと気付いたのか。

「つまり、狙われるってことか？」

「今すぐってわけじゃないにしろ、近いうちにはそうなれだろうね」

陽は少し考えてから、決断する。

「よし決めた。体勢を立て直し次第、第5支部を落とすぞ」

僅かに微笑みを浮かべて陽を見る。

「言うと思ったよ。で、作戦は？」

「俺、京、ルナで第5支部長のダンを仕留める。他は敵の大隊を相手してくれ」

陽はほとんど瞬間的に作戦が思いつくので、とっさの判断力などがずば抜けている。

そして、今回の人選も今ある戦力の中ではベストだろう。

今回は潜入ではなく殲滅なのだ、フィオは連れてきてもいい気もするが、ルナがいれば問題ないとの判断だろう。

「決行日は？」

「明日だ」

ずいぶんと急な話だ。

武器の整備とかは大丈夫なのだろうか。

「リリー、整備とか大丈夫？」

「はい、私が機人の点検、整備兼司令室メンバーに今日奪った武器の点検をしてもらい、あと自分達の武器は自分でやってももらえる間に合います」

リリーが1人で機人を全部見れるのかと思ったが、やると言ったからには絶対やるし、リリーのサポート能力はもはや未知数なので大丈夫だろう。

「じゃありりーお願いね」

「了解です」

もう気付いていると思うが、陽はリーダーとなっているが、作戦立案と決定しかしない。

基本的に纏めているのは僕なのだ。

だって、陽は子供が遊んでたら、一緒に遊ぶタイプだから他の誰かがしっかりしないといけない。

それで陽の親友で副リーダーの僕なのだ。

「じゃあ今日はもう解散で、各自作業に移って。ルナは部屋へ案内して、武器を渡すから僕についてきて」

「うん」

ルナについて分かったことは、ルナはあまり感情を表情に出すよう

なタイプではないってことだ。
でも、感情は意外と豊かで、表情にあまり出さないだけで、けっこう変化している。

「じゃあ、ルナもこれ持っててね」

ルナに渡したのは小型の拳銃。

それほど背が高いわけではないルナは、大きな拳銃や普通のよりも小型の拳銃の方が使いこなせると思ったからだ。

「どうして？」

このどうしては、敵の本部にいた自分に武器を渡してもいいのかわかなのか武器の自分に武器は必要ないってことなのだろうか。

いや、どっちでもいい。

「僕達はね、ルナのことを敵って思ってないし、武器とも思ってない。ルナは僕達の仲間だよ。だから、自分の身や同じ仲間の身を守るために、それを持っててくれると助かる」

そう言っつて、もう一度拳銃を渡す。
今度は素直に受け取ってもらえた。

「ねえルナ、少し話をしようか」

まあ、僕が喋りたいだけなんだけど。

「話？」

「うん。まずは僕から。僕はねバイオテロの少し前に、実の父親に人体実験として2種類の薬を入れられてるんだ」

表情の変化に乏しいルナでも、今回の話には明らかに気まずそうな顔をする。

「まあ、そのうちの一つはたぶんバイオテロのワクチンだったから、助けられたと言えば助かったんだけどね」

「じゃあ、京のお父さんはテロ組織に？」

「確かめてないから分からないけど、たぶんいると思うよ」

今更ながらに思うが、最初に注射された薬は何だったんだろうか。

「京はどうして、私に話してくれたの？」

初めて聞く人には刺激が強すぎたのかなあ。

僕の中では終わったことだし、『沈まぬ太陽』のメンバーは皆しってることだし、そんなに気にすることはないんだけど。

「僕の中では終わったことだし、ここのメンバーは知ってることだから、ルナにも知っててほしかっただけ。まあ、隠し事してるみただいだから、スッキリするために言ったただけだよ」

ルナが嬉しさと同情の入り混じったような表情をする。

話してもらったことが嬉しいのと、想像以上に辛い事実から、微妙な表情になっているのだろう。

「じゃあ次はルナね。まあ、言いたくないようなら聞かないけどね」
ルナとの間に沈黙が流れる。

あつ、地雷踏んだかなあ。

「私は」

京のこと（後書き）

反応微妙ですね。

近未来とかSFは俺にあってないかもしれません。

誤字・脱字・質問があれば感想欄までお願いします。
評価、感想、お気に入り登録よろしくお願いします。

ルナのこと(前書き)

評価とか感想ももらえると嬉しいです。

ルナのこと

「私は、よく分からない。ずっと武器として扱われて、人として扱われたことなんてなかった。でも、私を使える人間はいなくて私は不要物として、あそこに放置されてた。そこに京が来て助けてくれた」

でも、テロリスト達はどうやって武器とかの見分けがついたんだろうか。

どう見ても普通の人間にしか見えない。

「ルナが武器だったことはどうやって分かったの？」

「私はもともと人間だったらしい。でも、変な薬で武器にされたらしい」

人を武器に帰る薬なんて実在するのだろうか。

「それは誰から聞いたの？」

「私を使おうとした人が言ってた。でも、誰も私を武器にする方法が分からなかった」

でも、それが本当ならどうして僕はルナを武器にすることができたのだろうか。

「僕がどうしてルナを武器にできるのかも分からないけど、ルナは

今、僕達と来て良かったと思ってる？」

「うん」

感情の変化はあまり見られないが、この力強い返事からも、これが本心だと言うことは分かる。

「なら、それでいいんじゃない？過去も大事だけどさあ、一番大事なのは今、それからこの先どうするのか。だから、今が良いならそれでいい」

自分で思うが、そんなことを言うなら、何故過去の話をしたのかと疑問に思ってくる。

「京達は私がいても迷惑じゃない？」

「もちろん」

「人間じゃない武器な私が怖くない？」

「全然」

ルナは目に涙を浮かべる。

「……ありがとう」

涙を浮かべながらの、この言葉からはこれまでの辛い経験や、物として扱われてきたこと、そこからの解放されたことへの嬉しさの込められた涙なのだと思う。

だから、今は気が済むまで泣かせてやるべきなんだと思う。

「京、明日のことなんだけどさあ」

空気をぶち壊すように入ってくるのは陽。

その陽に向かって、かなり冷たい目を向けたのが自分でも分かる。

「あつ、わりい。……また……後の方がいいか？」

視線から何かを感じたのか、陽が退散しようとする。

「いや、いいよ。僕も話は終わったし、そろそろルナも寝た方がいいと思うし」

「そうか。なら、京の部屋で待ってるぞ」

「分かった」

陽はそれだけ言って、ルナの部屋から出ていく。

ルナの部屋にいたと言うのは、陽も分かっていたことだと思っが、ノックぐらいしたらいいと思うんだがなあ。

「じゃあ、ルナ。僕はもう戻ろうと思うけど、一人で大丈夫？」

ルナは返事をせずにコクコクと頷いている。

「じゃあ、また明日」

「……おやすみ……」

ルナの言葉を聞いて部屋から出ていく。

「待たせたね」

「いや、別に待ってねえけど」

僕の部屋に入ると陽は、自分の銃の整備をしていた。
そういうのは自分の部屋でやってもらいたいんだが……。

「それより、ルナは何で泣いてたんだ？」

「いや、いろいろ辛いこともあったみたいだから、それを乗り越えてもらおうと思ってね」

「京もこう見えて案外残酷なところあるからな」

こう見えてってどう見えてるんだろうか。
試しに聞いてみよう。

「ちなみに陽。こう見えてって言うけど、どう見えてるの？」

「ん？京はなあ、黒髪で無駄に整った顔してて、優しくて性格良さ
そんなオーラ出しまくってる。とかじゃねえのか？」

陽の中での僕は普通の容姿なのに、ずいぶんと過大評価されてるみ

たいだ。

そんなこと言うなら陽は、ところどころ撥ねた癖のある茶髪に、髪の毛の同じ色の眼、そして男前すぎる容姿に、性格も積極的なのだ。普通に考えれば陽の方がカッコいいに決まってる。

「過大評価もいいとこだね。で、そんな話をしに来たんじゃないんだろ？」

「あつ、そうだったぜ」

陽の顔が真剣なものとなり、僕の目を見て話し始める。

「京、よく分からねえけど、京とルナが組めば最強なのは分かった。だから思うが、京が組織のリーダーをやるべきだと思う」

何を言い出すかと思えば……。

「陽、わざわざそんなしょうもない話をしに来たって言うのかい？」

「なつ、しょうもないって」

溜息をついて陽の顔を見る。

「ねえ陽、陽には人を惹きつける何かがあるんだと思うんだ。そうじゃないとこんなにも人間が一人の人間に付いてくるわけがない。だから、陽は堂々と皆を引っ張っていつてくれればいいんだよ」

「でもよお」

「それに僕はリーダーって柄でもないから、陽がやってよ。面倒な仕事を引き受けるのなんて嫌だよ」

でも、陽が正面から堂々と弱音を吐ける人間は、恐らく『沈まぬ太陽』の中でも僕だけだと思う。

なら、陽が弱音を吐く時は、全て聞いてあげて、そこから陽を立ち直らせるのが親友の役目だと思う。

「京がそう言うんなら、俺がやるよ。悪かったな、こんなことで時間使わせちまって」

たぶん、陽が弱音を吐くぐらいなのだから、僕に話すまでに相当悩んでいたはずだ。

なら、聞いてやるのが普通だ。

「別にいいよ。これから特に予定もないし。陽も明日の準備あるだろうし、早めに寝なよ？」

「分かってるって」

陽がドアまで行ってから、振り返る。

「こんな作戦をいきなり立てたのも、京とルナがあっそこそだ。だから2人にはかなり負担かけちゃうことになると思う。すまねえな」

「何をいまさら。陽に負担かけさせられるのは始めてじゃないんだし、改まられる方が気分悪いよ」

「ほんと、人の好意を素直に受け取らねえ奴だな。じゃあ、また明

日な」

それだけ言って、陽はドアを閉めて自分の部屋へと帰っていく。おそらくは銃の整備の続きでもするのだろう。

「はあ、僕もするか」

陽が先ほどまで整備してた場所で、銃を取り出し整備を始める。

そして、この時はまだ気付かなかった。

次の日に行く作戦での犠牲を。

ルナのこと（後書き）

誤字・脱字・質問があれば感想欄までお願いします。
評価、感想、お気に入り登録よろしくお願いします。

襲撃開始

「京、起きて。陽が呼んでる」

朝目覚めると、目の前には銀髪赤目の美少女がいた。

いや、まてまてまて。

僕は昨日は1人で寝たはず。

なのに、何故こんな状況になっているんだろう。

「えーっと、おはよう?」

「おはよう」

何故、ルナが僕の上に乗っているのだ。

「えーと、ルナさん?」

「ルナ」

「ルナは どうして、僕の上に乗ってるの?」

ルナは首を傾げて、質問の意味が分かってないかのような仕草をする。

「ごうしないと起きないって、陽が言ってた」

陽のやつ。グッジョブ。

ビックリしたけど、朝からラッキーだ。

「いつもは起こされないのに、今日はどうして起こされたの？」

そう、いつもは決して起こされないのだ。

まあ、いつも特に予定がないからなのだが。

「忘れたの？今日は第3支部ってところを襲撃するって陽が言った」

あー、そういえば陽が昨日言った気がする。

「そういえば、言ってたね。出発まであとどれくらい？」

そんなに軽く言っているのか自分でも謎だが、緊張してるよりはいいだろう。

「5分」

なんで、そんな時間まで起こしてくれないんですか！

僕一人のために時間を延期するわけにもいかないし、頑張ってる間に合わすしかないか。

「ルナ、僕の銃が引き出しに入ってるから、弾と予備のマガジンの用意として」

「分かった」

準備を手伝っているルナのことを気にするのをやめ、着替えること

にした。

昨日会ったばかりの女の子の前で、着替えるとか変態って思われな
いだろうか。

「……京って、変態さん？」

グサツ

心に300のダメージ。

目の前が真っ白になった。

「ごめんルナ、僕のハートが粉々に壊されたから、今日はハートの
欠片を探しに行くってくる。陽には欠席って言っというて」

「京がいなかったら、作戦が成り立たないって言った」

僕のハートが15回復した。

「それに、私は京と一緒にいる」

ハートの器を手に入れた。

HPが全回復した。

「よしルナ、すぐに行こう！」

「う、うん」

ルナが少し困った表情をしながら頷く。

「おっ、やっと起きたのか京」

「陽、とりあえず言うておくけど、グッジョブ」
親指を立てながら言うと、陽も親指を立てて返す。

「？」

「じゃあ、陽にルナ、僕は準備できたから、そこそこ行こうか」

「そうだな」

ルナは陽とのやり取りに首を傾げていたが、準備ができたとのことなので、僕に銃を渡してくる。

「ありがとう」

銃とマガジンも用意して、完璧に戦闘準備はできた。

「じゃあ、行くか」

今度こそ出発。

陽動兼敵大隊の殲滅を任されてるのは、大悟を含む仲間達だ。
半分は遠距離射撃、さらにその半分が機人に乗り、残りが新開発した機獣で敵後方に周り挟み撃ちにする係だ。

「陽、京、ルナ気をつけるんだぞ」

「分かってるって」

大悟は筋肉がハンパなく、腕に子供ではなく中学生ぐらいでも、ぶら下られそうなくらいにムキムキなのだ。
そして、ところどころ傷のある顔は、いるだけで相当ビビる。

「じゃあ、そっちは頼んだよ大悟」

「任せてくれ」

うん、大悟が言うところ一番説得力がある。
安心して任せられる。

「じゃあ、俺達も待機場所に着こうぜ」

「ねえ陽、あと何分で作戦開始？」

「10分ぐらいじゃね？」

陽の体内時計は分単位で正確なので、あと10分で合ってるはずだ。

『陽さん、敵が出てきましたが、どうしますか？』

大悟達がバレたっばい。

さっきはまかせろって言うてたくせに、本番では緊張してミスっち

やうタイプなのか？

まあ、何でもいい。

とりあえず、敵が気づいたと言うことは、こちらも何かしら変更をしなくてはならない。

「リリー、大悟に予定は変更。好きにやれって伝えてくれ」

『了解』

これは、大悟なら確認次第迎撃するって思ってるからだろう。

不測の事態が起きた以上、現場の判断の方が大事な場合が多い。

「俺達も作戦開始だ」

ドカーン

大悟達も戦闘を開始したのか、爆発音が響く。

「向こうも始まったみたいだね」

「だな」

前回と同様に換気口から侵入している。

二回目と言うこともあり、僕と陽は意外と余裕がある。

それとは逆にルナは緊張してるのが見て分かる。

「ルナ、かたくなってたなら、成功することも成功しないよ」

「分かってる」

そうは言うが、さっきと何も変わっていない。

「陽、今回の目的地は？」

「最上階にある司令室、または支部長室にいるんだ」

ここは一階で、目的地は五階と言うことになる。

「まだまだ距離があるね」

「エレベーター使っちゃまうか？」

何をバカなことを言っているんだろうか。

「死にたいの？」

「冗談だつて」

この場で冗談が言えるほど落ち着いてるとは、陽はかなりの無神経なのかもしれない。

「どこまで進むの？」

「この先に非常階段がある。そこから5階までかけ上がる」

「ベタだけどいいんじゃない？」

そう行ってる間に非常階段まで到着する。

襲撃開始（後書き）

続けて書いたら、長くなりそうだったので、分けてしまいました。

誤字・脱字・質問があれば感想欄までお願いします。
評価、感想、お気に入り登録よろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0948ba/>

陰な僕と武器な彼女

2012年1月6日21時51分発行